

「学び合い、高め合う子どもの育成」

子どもたちが主体的に学び合う授業づくり (理科・生活科を通して)

はじめに

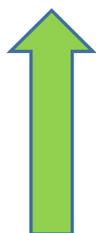
本校は、これまで「学び合い、高め合う子どもの育成」を研究テーマに校内研究に取り組んでいます。本年度も昨年度に引き続き理科と生活科などの教科を通して、次年度より全面実施となる新学習指導要領の主旨に迫り、子どもたちの主体的な学び、対話的な学び、深い学びを通して「生きる力」を育む授業力の向上をめざした実践的な研究を進め、授業改善の視点を持つことができたことが大きな成果と考えています。

その成果を広く周知できるよう、本年度はリーフレットの形式にまとめ、学校に関わる多くの皆さまに校内研究の取り組みについて理解を深めていただきたいと思います。ぜひ、ご高覧のうえ、ご指導・ご助言を頂ければ幸いに存じます。

校長 末藤 晃英

研究の方法

研修主題の「学び合い高め合う子どもの育成」へ



今年度の仮説

効果的な手立てを考え、主体的に学び合う授業を繰り返すことで、研究主題の「学び合い、高め合う子の育成」に繋がると考える。

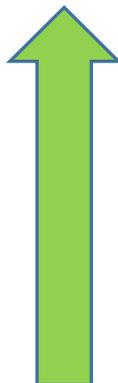
今年目標

- ① 目指す子ども像へ向け、手立てを考え授業を実践することで、主体的に学び合う姿を見ることが出来る。
- ② 子どもの思考の流れに合った年間計画の作成し、次年度へ引き継いでいく。



① 子ども像の設定

発達段階に応じた「主体的に学び合う姿」を低・中・高学年ごとに設定し、その姿へ向けて手立てを考え授業実践を行う。



② 単元構想・年間計画の検討

主体的に学ぶ姿のある授業を行うために、単元の順番を検討したり、単元構想を作成したりして、子どもが学びを働かそうとする場を確認し、そのための手立てを考える。

③ 職員研修

講師の方をお招きし、単元構想図研究や教材研究を行い、教師力を高める。

ブロックごとに設定した主体的な姿

<低学年>

- ・ 友だちと進んで話そうとしたり聞こうとしたりする子
- ・ 伝え合ったり、話し合ったりすることで、いろいろなことを考え気付ける子

<中学年>

- ・ 既習学習や生活経験をもとに、予想を立てて、実験・観察に取り組む子
- ・ 意見交流することで、比べながら自分の考えを広げる子

<高学年>

- ・ 目的意識をもって実験・観察に取り組み、問題解決をしようとする子
- ・ 意見交流することで、自分の考えを広げたり深めたりする子

<わかば級>

- ・ 自分も他者も認めるようとする子
- ・ 自分から他者とかがわろうとする子



1年生の実践「もうすぐ2年生」

○友だちとの交流や体験活動を重ねる単元作り

これまでお世話してもらうことの多い立場であったが、子どもたちは「もうすぐやってくる新1年生のために自分たちで会を開きたい」というお兄さん・お姉さんとしての願いをもった。その計画や準備の中で、友だちとたくさん交流し気づきが増えていくことをねらい、グループ活動や場の工夫を多く取り入れた。すると、グループで話し合う中で、互いの考えの良さを認め合ったり、そこから更にアイデアを膨らませたりする姿が見られた。また、新1年生はどんなことを知りたいか・喜ぶだろうかという相手意識を持ちながら、計画・準備することができた。



2年生「生き物を飼おう」「作って遊ぼう」

○生き物博物館・あそびランドを開くという目標の設定

単元の導入で子どもたちと話し合い、単元を通した目標を設定した。「みんなで会を開催する」という目標をもつことで、友だちと進んで話そうとしたり聞こうとしたりしながら準備を行うことができた。

また、生活科の単元は授業の時間が長く、意欲の持続が難しいこともあるが、1年生や3年生を招待すること目標にしたことで相手意識をもち、意欲を持続させながら活動に取り組むことができた。招待した時には1年生や3年生に喜んでもらい、達成感を得られることができた。



3年生 「じしゃくのふしぎ」

○前単元「電気で明かりをつけよう」と比較させる授業展開

どんなものが磁石につくのか予想する際、ものの材質に着目することをねらって、前単元の「電気で明かりをつけよう」の実験結果や考察を振り返った。磁石につくものは、電気を通すものと同じで金属でできたものかもしれない、紙や木は磁石につかないなど、前単元の学習を活かして予想することができた。

また、磁石につくもの・つかないものを視覚的に分かりやすく色別に分け、全体で共有したことによって、磁石につくものは鉄でできているものという考察を書くことができた。



4年生 「ものの温度と体積」

○子どもの意欲を引き出す授業展開

自分で考えた仮説を検証するためには、どのような方法で実験すればよいか一人ひとりが自分の考えを表現するようにした。そして、ペアやグループで話し合うことでより良い方法を考えることができ、意欲的に実験を行った。いろいろな方法で得られた結果をもとに総合的に考えるようになり、具体的なイメージをもって考察を書くことができた。

一人ひとりの考えを取り上げ実際に実験してみることで、理科の学習を積極的にやり楽しむ姿をみることができた。

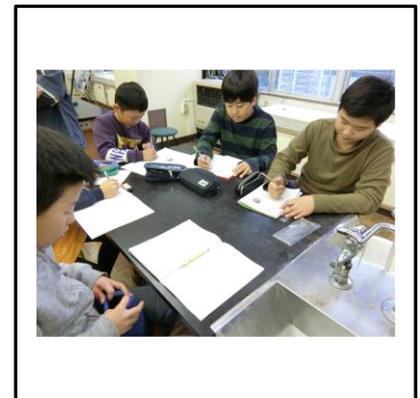


5年生 「もののとけ方」

○実験結果を視覚的にとらえさせるためのグラフの活用

数値だけでは溶けた物の量の違いや比例の関係をとらえることは難しいため、実験結果をグラフに表し視覚的にとらえた。そうすることで、水の量や温度が変わると溶ける物の量がどれほど変化するのかについて、今までの実験結果と比較しながら考察をまとめることができた。

また、単元を貫く学習課題として「もののとけ方のひみつを見つけ、結晶を作ってみよう」と設定したことにより、目的意識をもって学習に取り組み、意欲の継続につながった。



6年生 「水よう液の性質」「てこのはたらき」

○目的意識の設定と考察をまとめるための工夫

導入で教材と出会ったときに見つかった疑問をもとにつくった学習課題を解決するという目的意識をもって学習に取り組んだ。日常生活と関係づけながら学習に取り組んだり、新たな問題を見つけて解決していったりするなど主体的に学ぶことができた。

また、仮説を確かめてから実験をしたり、実験結果から理科的な見方・考え方を働かせたりしたことで、自分の力で考察をまとめる力を伸ばしていくことができた。



わかば級「うっしーまつりでお店をひらこう」

○実物を使った学習活動の展開と ICT 機器の活用

バザー当日に落ち着いてお客さんと接することができるように、当日に出すお店と同じ役割を分担したり、実物を使って活動したりすることにより、自信をもつことができた。さらに、タブレット端末で会計を行うことで、計算が苦手だったり、間違いを気にして活動が止まったりする児童にとって、レジ係を進んで行う意欲を持たせることができた。また、お客さんとお店の人の役割を体験したことや振り返りの時間を大切にすることで、自分だけでなく他者も大切にすることを意識させることができた。



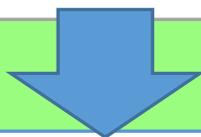
校内研修

○「理論研究」 筑波大学附属小学校 辻 健先生

本年度も2度来校していただき、辻先生が実践された具体的な単元の導入方法をビデオで見ながら、これからの評価の仕方についてのご指導をいただいた。結果ではなく過程を大切にし、児童に自覚化を促す言葉をかける重要性など新学習指導要領に向けての理論も学んだ。

○「実技研修」 株式会社 ガステック

11月26日、気体検知管の正しい使用方法について学んだ。専門家の指導により、実際に手に取り行うことで正しい使用の仕方を確認できた。



成果と課題

低・中・高学年ごとの「主体的な姿」を目指すというテーマがあることで、系統立てて、研究を進めることができた。また、単元構想を作成し検討することで、見通しをもちながら研究を進めることができた。研究を進めていくことで、主体的な姿のある授業をするためには、単元の導入に子どもたち同士で疑問や考えたいことを話し合い、目的意識をもたせた上で学習を行うことが効果的であることが分かった。

しかし、授業研究の中で高め合う姿を多く見ることはできなかった。そのため「主体的な姿」が「学び合い・高め合う姿」に繋がっていったかという疑問が残る結果になった。今後、どのようにすることで、高め合う姿を授業で多く見られるようになるのか、検討をしていく必要がある。新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」のある授業が大切になってくる。本校の研究主題「学び合い・高め合う子どもの育成」とも関連するところであり、今後も研究を進めていきたい。 研究主任 阿部 滋

終わりに

今年度は今までの研究で大事にしてきた「単元構想」に加え、子どもの思考の流れに沿った年間計画の作成に着手し、子ども同士が学び合う姿を具体的にイメージし共通理解することにも取り組みました。まだまだ道半ばではありますが、これからも「主体的・対話的で深い学び」に向かって研究を進めていきたいと思っています。

なお、本校の研究推進に懇切丁寧にご指導くださいました筑波大学附属小学校 辻 健先生、県西教育事務所、小田原市教育委員会の指導主事、研究に関わってくださった関係機関の皆様にご心より感謝申し上げます。

教頭 栗原 光